

OISCA

— 人と育む、地球といきる —



〈特集〉新春鼎談

自然への礼節を持つ

JANUARY | 1
2024

自然への礼節を持つ

「アロマスプレー」と「つみ木」。
どちらもオイスカが国内で取り組む
森づくり活動から生まれた森の恵みです。
そうした活動に専門家として携わる
村上志緒さん、川合亜希子さんは、
自然を敬い、自然にお返しをする
「作法」があり、「礼節」を持つことが
大事だと説きます。
言葉で説明することが難しい
“人の心の世界”につながる
さまざまな事象や、人が取り戻すべき
自然への「礼節」について語ります。

特集

新春 鼎談

村上 志緒

株式会社トトラボ 代表

川合 亜希子

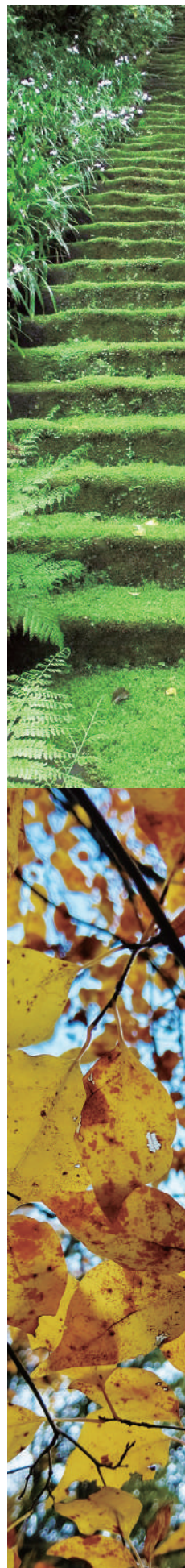
株式会社Verita 代表取締役

中野 悦子

公益財団法人オイスカ 理事長



左から川合氏、中野、村上氏



What's OISCA

オイスカ・インターナショナルは、「すべての人々がさまざまな違いを乗り越えて共存し、地球上のあらゆる生命の基盤を守り育てようとする世界」を目指して1961年に創立された国際NGOです。現在、41の国と地域にネットワークを持って活動しています。

公益財団法人オイスカは、1969年にオイスカ・インターナショナルの基本理念を具体的な活動によって推進する機関として生まれ、主にアジア・太平洋地域で農村開発や環境保全活動を展開。特に人材育成に力を入れ、オイスカの研修を修了した現地の青年は、各地で地域開発に取り組んでいます。国内では、農林業体験やセミナー開催などを通して啓発活動を積極的に進めています。

OISCAという名称の意味

O	rganization	機構
I	ndustrial	産業
S	piritual	精神
C	ultural	文化
A	dvancement	促進

人間の生存に不可欠な“産業・精神・文化”のバランスを大事にした発展を世界規模で推進していくことを目的として、このように名付けられました。



中野 今日はお忙しい中お集まりいただき、ありがとうございます。また、日頃からオイスカの活動に、専門分野を活かしてさまざまなご協力をいただいておりますこと、あらためて御礼申し上げます。村上さんはハーブが専門で、「富士山の森づくり」などの現場に育つ樹木や植物を活用したアロマスプレーづくりをはじめとする取り組みを、川合さんには木育活動へのアドバイスをいただくなど、主に国内の森づくりのフィールドでご活躍いただいておりますが、今日は森づくりに限定せず、いろいろなお話をおうかがいできるのを楽しみにしています。

始めに、自己紹介もかねて最近の活動についてお話しただけですか。

村上 私はトトラボという会社を立ち上げて、民俗薬草文化などを研究しながら、人と自然とのつながりから生まれる植物療法について、学び、広めていくための取り組みをしています。オイスカさんとの関わりは、「富士山の森づくり」の現場で、森の植物を活かしたバームやアロマスプレー

ーづくりをしたのが最初で、現在は、ほかのプロジェクトの現場でも木だけではなく、森の下層植生の香りや効能に焦点を当てて、私たちの生活に活かす活動を進めています。各プロジェクトでは、木を植えて育てるフェーズから、その森を守りながら恵みを活かす発展的な取り組みを模索していて、その中で生まれたものです。

中野 コロナ禍ではアロマスプレーを医療従事者に届ける活動もしていただきましたね。

村上 はい。シラベの葉がこのような形で活用できるとは思ってもいませんでした。オイスカ山梨県支部（以下、県支部）が事務局を務めているやまなし水源ブランド推進協議会※で、製品化しています。最近では、昨年9月に山梨県の早川町がホストとなって開催された全国ハーブサミットで、県支部と共に実行委員のメンバーとして関わらせてもらい、杉の葉の蒸留体験のワークショップを担当しました。地元の早川町や山梨県内の方だけでなく、全国からハーブに関心をお持ちの大勢の方が足を運んでくださり、辻一幸

※9ページにて紹介



上／古民家を活用した「トラボみずともり研究所」。
玄関に置かれた看板

下／町の面積の96％が森林という早川町の山あいに研究所がある

町長も「早川町にこんなに人が集まるのは初めてのことではないか」と喜んでいらつしやいました。また、11月にはインドネシアで「子供の森」計画（以下、CFP）に参加している子どもたちの代表が親善大使として来日した折に、早川町を訪問し、蒸溜体験などを通してハーブについて学んでもらうことができました。

中野 村上さんは早川町にお住まいなんですか？

村上 いえ、今は神奈川県に住んでいます。ただ、出身は山梨県で、県支部の以前の事務所は、私の実家のすぐそばにあったんですよ（笑）。町長のご厚意もあり、古民家を活用させてもらって県支部の田中美津江さんと一緒に、みずともりプロジェクト「トラボみずともり研究所」を早川

町に構えて活動しています。

中野 子どもたちも喜んでほしいですね。CFPでは植林だけではなく、ハーブの栽培などを行っている学校もありますから、さらなる活動の広がりも期待できます。

村上 インドネシアのCFP活動ではハーブ園を設置している学校もあるそうですが、薬や食品としての活用はしても、香りを楽しむことはないそうで、今回は特別な器具がなくても蒸溜できる方法と一緒にトライしました。

中野 CFPは、森を育て、自然に触れる活動を通して子どもたちが自然を愛し、守っていく心や行動する力を養う活動ですが、川合さんも木育を通じて子どもたちの育成に取り組んでくださっています。その活動から感じることや最

村上 志緒（むらかみ しお）

株式会社トラボ 代表／薬学博士

複数の企業勤務を経て、トラボの前身となる「トラボ植物療法の学校」を2009年に設立し、同年からフィジーをフィールドにした研究もスタート。15年、株式会社トラボを設立。

研究活動の傍ら、セミナーやワークショップを開き、人と自然とのつながりから生まれる植物療法について、自然・生活文化・科学の観点から学ぶ場を提供している。

(株)トラボ <https://www.totolab-shop.com/>

近の取り組みについて教えてくださいいただけますか。

川合 私は、保育園のマネジメントや一般企業などでの研修をはじめとしたコンサルティングの仕事をしています。教育活動にも長く携わっていて、現在、オイスカの「木育プロジェクト」に総合プロデューサーとして関わっています。最初にオイスカの山梨県支部に出向いた際は、木のおもちゃをご紹介しますと



いうことで、オンラインの打ち合わせではなく、直接木の香りに触れたくて遠方から足を運ばせてもらいました。県支部の田中さんから、オイスカの理念や目指すものについてお話をうかがい、魂が震えるような感動を覚えました。「木育ひろば」は、日本の森の木で作られたつみ木を使って子どもたちが遊ぶものですが、日本人が本来持っている精神力の強さや感性などを呼



1：「富士山の森づくり」の勉強会で講師を務める。参加者は、シラベの葉を活用したアロマスプレーづくりを体験



2：早川町で開催されたハーブサミットのパネルディスカッションでは、ファシリテーターを務めた

川合 亜希子 (かわい あきこ)

株式会社Verita 代表取締役

25年間、乳幼児教育に携わり、2016年に 教育事業会社 Verita を設立。選択理論心理士、保育士、幼稚園教諭、スクールカウンセラーなどの資格を持ち、教育の現場における職員研修や講演会のほか、保育園コンサルティング、子育て講座をはじめ、企業を対象にした研修での講師を務めるなど幅広く教育活動を行っている。

(株) Verita <https://verita-a.com>

1：木育ひろばで使う木のおもちゃは、国産材を活用し、丁寧に作られている

2：木育は子どもたちの感性が育まれるだけでなく、大人もさまざまな気づきを得られる

本来日本人が持っている精神力の強さや感性を呼び覚ましてくれる

うに感じます。でも、そういう子どもたちが、目立つ色や刺激の少ない本物の木のおもちゃに出会い、自分自身からおもちゃに関わることで、遊びこみ、自分と向き合うことができるんです。感性や非認知能力というか、何か数値化できない能力のようなものが

呼び起こされているような気がしています。先日、初めてのろう学校で「木育ひろば」を開催した時、積み木を積み上げて、作品を壊してはまた積み上げてを繰り返しながら、積み木と向き合っているお子さんがいました。先生のお話では、普段は集中できずに外

に出て行ってしまう児童とのことでしたが、たった2時間の積み木遊びで集中力や自己コントロール力を発揮する本来の姿が引き出され、木育の素晴らしさを再認識しました。**中野** 私も「森の積み木広場」に行ったことがあります、積み木遊びは、大人も夢中に

なってしまうですね。お父さんお母さんが子どもをほったらかしにして遊んでいる光景も目にしました(笑)。親子で一緒に遊べるのは素晴らしいことだと思いますし、活動時はスマートフォンを持ち込ませないことによって、そうした結果が得られるのだと、後でスタッフから聞きました。子どもが一緒に遊んでほしくても、親はスマートフォンをいじっているといった状況が日常にはありますから……。

川合 親子一緒に参加してもらう活動では、形が数種類しかない積み木で、創造性をスパークさせて夢中で遊ぶ子どもたちの姿を親御さんたちに見てもらい、子どもの持つ可能性や彼らの成長を感じてほしいと思っています。大人も子どもも育てるのが木育です。特にオイスカの木育活動には、その奥にオイスカの精神がしっかりと入っているのがポイントです。いろいろなところで木育が流行っていますが、オイスカの取り組みは、長い歴史の中で、世界で「実」を作ってきた根底にある理念が伝わる、唯一無二のものと感じながら活動に携わっています。

中野 ありがとうございます。お二人には主に国内での取り組みに携わっていただいておりますが、八百屋のごくあるオイスカのさまざまな活動の多くは海外で展開していて、中でも特にアピールしたいと最近思っているのは、タイのチェンライでの活動です。はげ山になってしまっていたところに1980年代以降、日本からも多くのボランティアの人たちが行き、地域の人たちと一緒に森の再生に取り組んできた場所です。昨年現場に足を運んだ本部のスタッフから聞いた話ですが、活動当初は、村のため池の水が枯れていたのですが、今は森が育つてきて保水効果が高まり、養魚ができるまでに水が戻ったそうです。森が再生したことで、林床で山菜が採れ、はちみつも採取でき、地域の人たちが笑顔で生き生きと過ごしている、村に活気も戻ったというんです。まさに植林の効果ですよ。森林の働きが人々の生活を豊かにしている、好事例の報告を受け、オイスカがアジアの各地でこうした取り組みをしていることの意

義をあらためて感じました。

また、オイスカでは50年以上にわたり、アジア太平洋地域の青年たちを対象にした農業の研修もしていますが、経済発展が著しい国では農業にあまり目が向けられなくなっ

情です。でも人類はそれを持ち越えられると、研修生の姿を見て私は確信しています。この「人類大家族」の精神を広げていきたいと思って活動を続けています。

川合 オイスカの創立者が掲げておられた理念に触れるたびに、私の目指す生きざまそのものだと感じます。私自身のお話をする、母はクリスマスですが、祖母が京都の平安京の守り神と言われている

た神社に奉仕をしていて、小さい頃から神社になじみがありました。でも、家自体はなぜか仏教なんです。日本では、こんなふうの一つの家庭の中にもたくさんさんの宗教が存在しています。また、高野山の麓には、丹生都比売神社があって、空海は仏教の一つの宗派である真言宗の開祖でもありながら、仏教の修行の前に、まずは神様へ感謝し、「おかげさまで」の気持ちを持つこと

を説いていたそうです。ユネスコも、宗教を融合させるというのは世界にはないことだと、そのユニークさに注目しているそうですが、私もそこにこそ「調和」という世界平和に必要なものがあると思っています。私は宗教の原点は宇宙にあると思っています、仕事でも中心においている選択理論心理学もそうですが、原点やあり方が同じなんです。

SDGsが広まるのも大事ですが、利益を優先するような組織では、目的が逆転してしまいうこともあります。でも、オイスカの木育活動を通して感じてきたのは、優先順位が利益やお金ではなくて、自然界への礼節をただ純粋に願い、行動するあり方です。オイスカの存在や活動、「人類大家族」などの考え方はもちろんですが、それを現実のものにしようにとする「あり方」そのものを教育として伝えていくことが大事なかなと思います。私が携わっている木育も、簡単に言ってしまうと「木で遊ぶ」ことなのですが、その奥底にある大切なものを伝えながら、オイスカさんと一緒に人づくりに取り組んでいき

受けた青年たちを日本に招聘し、1年程度の研修を行っていますが、研修センターでは合宿スタイルで寝食を共にしています。研修を終え、彼らが帰る時、肌の色や宗教に関係なく、自分たちは兄弟、家族だと言って別れを惜しんで涙を流して抱き合っています。その光景を見ると素晴らしいなあと感じます。オイスカの創立者が「人類大家族」と言っていました。各センターと一緒に研修をした彼らのこういう姿がまさに「人類大家族」を表していると思います。宗教の違いなどで、この地球上には未だ争いもあるのが実



いとと思っています。**中野** オイスカの考えに共感して活動を支えてくださる方の存在は本当に心強いです。人を育てる教育活動は、国としても本当に大事な柱だと思いますが、それが揺らいでいる面もありますよね。**川合** 私たちの世代より上の人たちが、自然に身につけてきた当たり前のこと、例えば手足や頭が動くならば、できることは自分ですることとか、自然や神様に感謝するといったことが、今の子どもたちには受け継がれていないと感じます。学習指導要領が改定されて、今は「生きる力」を身につける教育が現場で求められていて、一方的に「させよう」としてきたこれまでの教育を変えることに現場は右往左往しています。ここで変わらなければ、日本人の本当の精神力の強さや感性の素晴らしさが、忘れ去られたままになってしまいます。だからこそ、先ほど申し上げた、数値化できないような能力や感性を育むことができる木育を推進していきたいと考えています。木育の成果の整合性を問われることもあるのですが、

実際に取り組んでいる学校の先生やお母さんたちへのインタビューから得られた結果が真実です。木育は、素朴な、生きている木を触りながら感性を呼び覚まし、能動的に物事に関わる習慣を小さな時から身につける教育です。学校現場で必須授業にしてもらうことを願いながら活動を続けています。

村上 子どもって、何もなしとところから何かを作り出す力や本質を感じ取る力を持っていると思います。でも、今の日本においては、そうした「人間の持つ大切な力を守り育てる」ことにに対し、あまり意識を持たずに手放してきてしまっているのが現実なのではないでしょうか。私はフィジーをフィールドにしてハーブの研究を行っています。その過程では、人の持つ力を確かに感じますし、たくさんの気づきや学びもあります。私はもともと生化学を専門にしている、その中で漠然と感じていたのは、人間が何もしない方が、生態系はうまく回っていくのではないかということでした。人間は自然の持つ「律」に対して余計なこと



木のおもちゃ(上)と「森のつみ木広場」の様子

をしているのではないかと。でも、フィジーに行くと現地の人たちと関わる中で、「人間って本来はこんなに賢いんだ」と感じるものがたくさんあるんです。それは、ハーブをどう使っていくかという日常的なことから、私たちはどう生

きていくかという根本的なことも含みます。フィジーでは大人は子どもたちに対して絶対的な責任があることを強く自覚しながら向き合っています。例えば私たちも電気が通っていない、自給自足が基本の離島に行った時には、子ど

大人は子どもたちに 絶対的な責任があると 自覚して行動している

もたちの前ではパソコンは広げないようにしていました。どんなお土産なら渡していいといったことは、近くにいた大人に聞くようにとのアドバイスももらいました。それは

全ての大人が子どもの行動や思考について判断して関わる力を持っているということだと思います。親や大人は子どもたちから敬われ、頼りになる存在で、校長先生に至っては、名前を出しただけで子どもたちの背筋がピンとするなんてこともあったりします。

中野 日本も昔はそうでしたよね。子どもたちが今置かれている状況は、大人たちがつくりに出してきたものであり、その責任は大きいですね。

村上 フィジーの子どもたちは、日々、大人にくっついて歩いていて、その中で学んでいます。ハーブに関しても詳しくて、蚊に刺されたらこの草の汁がいいって塗ってくれることもあります。30代の若

い人たちとも現地で仕事をしますが、彼らは電気もない、お店もない中で、必要なものはすべて自然の恵みからいただく生活をしてきて、その中で養われている力強さを感じます。きっと、フィジーのような自然の中での生活でなくても、木育活動を通じて木に触れることで、人間的な力強さみたいなものが養われていくのだと感じます。それと、川合さんがおっしゃっている非認知能力や感性ということにつながると思うことなんです……。大学のプロジェクトで、薬草のインベントリ調査をするのにフィジーに行った時、現地で薬草を扱っている方たちに教えてもらったさまざまなことを本にしました。作ることは作ったのですが、文字にしたときに抜け落ちてしまうことがとても多いことに気づきました。つまり人が相手の体温を感じながら学んでいく事柄の中には、も

のすごく尊いものがあるのに、文章にすると、そういうものが全て落ちてしまう。人や自然との関わりの中や、大人たちについて回って得ていくような繊細な知恵って、本の中ではなく、人のつながりの中にしかないということを感じたんです。そして、フィジーの子どもや若者たちにはそういう知恵が育まれていて、目の前の出来事に対しても、これはこうだからこの結果になったという理屈を考えたり、問題を解決していく能力の強さもあるように感じます。今の日本では、そうした知恵や能力を身につけることが難しい面もあるかもしれませんが、それでも日本の大学生とお話をする、「こういう考えもあるんだ」と勉強させられる面もあって、若者の力の強さも感じています。

中野 私自身はハーブと言われても何も知らないと思ったのですが、子どもの頃は田舎で育ったので、薬草は身近にありました。あせもができたら桃の葉を使うとか、ゲンノシヨウコやヨモギなんか身近な薬草として活用していました。血止めにはこの草、ヨ

モギはどのように使うとか、子どもの時から自然と身についていました。親は畑仕事で忙しいので、ほったらかしにされている子どもたちは、ちよつとしたケガなら、その辺の草で対処することぐらい自分たちの知恵として備わっていたわけですね。今は便利すぎて薬草に目を向けられない。薬局で買った薬があるから。本当は自然の中に全部神様が与えてくれているものがあるのに、それをちゃんと利用するとい

う大事なことを私たちは忘れてしまっていますよね。以前、子どもたちを山に連れて行った時、何もないからどう遊んでいいかわからずにいる様子を目にしました。私が子ども頃は、何もないところから遊びを生み出して、時間が過ぎるのも忘れて遊んでいたように思うのですが。
村上 ある程度ほつとくと遊びが始まると思いますよ。歌ったり、何かを見つけたり。これまでで体験がないから時間がかかるだけだと思いますが、何もないところから遊びを生み出す力は、日本の子どもたちにも備わっているはずなんです。それを刺激することが

大事で、その一つが木育なんですよね、きつと。

中野 森の中に一日ほつぱり出されたら、お腹がすいたと泣くだけなのか、食べられる何かを見つけてくるのかは、大きな違いですね。

村上 しばらく泣かせてみるのも大切ですよ。そして、やがて我を取り戻して何か見つけてくる。それが生きる力になっていくと思います。何もないところから何かを作り出せるということは、生きる力として重要だと感じています。フィジーは、新型コロナウイルスの感染拡大が始まった時、完全にシャットアウトしたんです。外から物が入ってこなければ、当然お店から物がなくなるわけですが、フィジーの人たちは、「政府が自分たちで何とかしろと言ったから」と、みんな次の日には漁をしたり、畑に植えたりしていました。もちろん、日本と比べたら気候的な豊かさもあるけれど、物がないという状況下で強いのは、フィジーの人たちみたいに、作り出す力がある人たちだと感じました。

中野 フィジーは完全に国を



ハーブを採取するフィジーの女性たち

自然にお返しをする作法 を持たなければいけない

封鎖したんですね……。日本じゃ無理でしょう。

村上 過去に伝染病で痛い目に遭った経験もあるからだと思います。そして、シャットアウトしても大丈夫だという自信もあるからですよ。彼らの、自然の中でもものを作り出しながら生きていく力の強さは、オイスカの森づくりの活動の起点にもつながると思います。私が「富士山の森づくり」に関わるようになってからも、シラベを使って何か作り出せないかというところ

から始まっています。シラベだけではなくて、森には植物があつて、昆虫がいて、さまざまな命が一緒に存在している。その舞台を見せてもらえるのがとても嬉しかったし、ここならいいものが作り出せると感じました。そして、森から自然の恵みを受け取りながら物を作り、私たち人間が生かされているのだから、私たちは自然にお返しをする作法を持たなければいけないという考えがオイスカにはあるのだと思いました。自然療法



をする時にも同じ考え方を
持っているのだと、そうした点で
も、私の活動とオイスカはつ
ながっているのだと感じて心
強く思っています。

川合 先ほど村上さんが言葉
にすると抜け落ちていくもの
のお話をされましたが、それ
が第六感なのか、数値化でき
ない力や感覚なのか分からな
い、目には見えないエネルギー
だけだと、確かに存在する、
影響のあるものとして意識す
ることが大事だと思っています。

い、離れ島で若者と蒸留をす
ると、みんな、かまどに入れ
た火のコントロールがうま
い！ 私にはとてもできませ
ん。私だって子どもの頃、自
宅のお風呂は薪で沸かしてい
たので火加減の調整はできる
はずなのにできないのは、誰
かがやってくれたのかなあ？

中野 私は自分でやっていま
したよ。途中で薪から石炭に
変わりましたけど。

村上 自分でやって、しっか
りと血肉にすることが大事で
すよね。さらにはちゃんと次
の世代につながっていくこと
で、人の生きる力が強くなっ
ていくのだと思います。祖母
ができたこと、やっていたこ
とが母の世代になったら、で
きることがかなり減って、そ
こから私の世代でさら
に減って、これが加速
していく……困ったこ
とです。

川合 その火の加減も
同じで、言葉で教えら
れるものではないです
よね。言語化できない
ことをどう教えるのか
という教育の限界を突
破するには、実体験し
かないと思っていて、

それはフィジーの人たちが何
が上手で、どう賢いかとい
うところにヒントがあるよう
な気がしました。

村上 フィジーの人たちの賢
さは、基本的な自然の摂理
みたいなものを本質的にしっ
かり捉えている点にあると思
っています。その中にはシン
パシーを持つということもあ
って、植物と私、人と人との
間のシンパシーみたいなもの
。地球上に物として存在する
ものには、動いているという性
質が原子のレベルからあつて
2つの原子の間には引き合う
作用と離れる作用があつて、
その対極的なものがバラン
スをとっているという摂理を、
日頃の生活の中で本質的に理
解しているように感じます。
自分の体験から今、目の前や
遠く離れたところで起きてい
ることに對するシンパシーや、
それまで知らなかったことに
對するイマジネーションを育
てることって大事なことでと
思うんです。人間は生物的に
は、霊長類の一番進化したと
ころにいて、進化の只中に存
在するものは試行錯誤をしな
がら、もしかしたら減じるか
もしれないけど、でも本来は



やまなし
水源地ブランド
推進協議会

やまなし水源地ブランド推進協議会と 「みずともり mizutomori」のこと

オイスカが山梨県をフィールドに、自治体や企業との協働で行ってきた取り組みを通し、2012年に発足しました。12の産・官・民の参画メンバー（オブザーバー含む）で活動し、オイスカ山梨県支部が運営事務局を務めています。

参画メンバーの早川町、丹波山村、道志村では、都市部の水源林となる森を育てていますが、その整備や間伐材の利活用をはじめとする森林資源を活用した産業の振興といった面で、課題を抱えています。さまざまなステークホルダーと連携して課題解決に取り組み、地域活性化の新たなモデルづくりを目指しています。

また、水と森によって育まれてきた地域の自然や文化を守り、活かしていくことを目的に立ち上げられたのが「みずともり mizutomori」プロジェクトです。早川町ではスギを、丹波山村ではヒノキを活用したアロマ除菌剤やエッセ

ンシャルオイル（精油）を「みずともり mizutomori」シリーズとして商品化するほか、自然と人との関係や作法を学ぶための環境教育なども展開しています。



左／山梨県内のヒノキやスギなどを活用したアロマ除菌剤（上）と精油
右／精油づくりなどのワークショップでは、参加者が森に入って材料を確保する体験も

反応しながら選択をして進化していくものです。自然の摂理の中で、人間社会も自然の中の一部だとすると、それがどう組み上がって生き物として進化するのかということが試されているような気がしています。

川合 シンパシーは、私も日々意識しています。コンサルティングで関わる企業や保育園でも組織の中でシンパシーを生むことが求められることがあり、「計画された偶発性」と言いますか、その場その場でいろいろ考えて動くので、直感型コンサルティングなどと言われています。組織はシンパシーの調和や逆に人への反発心で構成されていて、でもなかなかそれを言語化して伝えることが難しい。組織というのは常に移り変わっていて、そこにいる人が内側から変わり、やる気を出すには、よい風土の中で影響し合うことが大切で、それらは、本当は見えないものだからこそ、効果があるのかもしれないですね。村上さんは、シンパシーを日本語にすると、一番近い言葉って何だと思いますか？

村上 日本語で……同情って

訳すことがあるけど、そうじゃないですよ。漢字で見ると合っているけれど、実際の日本語の意味とは違いますよね。生物学的な言葉で言うとか、共振とか共鳴現象みたいなものに近いかもかもしれません。

川合 共振共鳴……みたいな感じがですね。

村上 そういう力が強いと、相手のことを知ろうと思ったり、喧嘩でも何でもいいから相手と交わろうという気持ちで働くことに通じるのかなあと思います。

川合 まさに親子関係、母親と子どものつながりも同じだと思います。だから、母親の心持ちは、シンパシーで伝わるので、母親自身が心地よく過ごすことが大事だと、いつもお話しているんです。それと、調和の中身って何だろうということも考えます。シンパシーみたいな、言葉にするのが難しい目に見えないたくさんのものが、人種が違ってても調和し合うことで世界平和につながるのかなあ。私自身は人材育成の分野で、人と人とのつながりの中のシンパシーという点で、村上さんがおっしゃることにとっても共



「人を敬う」ことと 同じように「自然も敬う」

感できます。また、先ほどお話にあった自然と人とのシンパシーについては、オイスカの活動の中で伝えようとしている「自然に対する礼節を持つ」ということに通じることなのかなあと感じました。「人を敬う」と同じように「自然も敬う」ことが大事だということとは、「木育ひろば」の中でも、体験で感じることはできると思いますが、それを子

どもたちに分かりやすく伝えるため、ストーリー調で話をしたり、実際のリアルな写真や紙芝居を使ったり、ちょっとした言葉掛けの工夫をするなど、チームで案を生み出しています。

村上 地球を舞台にして生きている私たちは、人と人、人と森といったいろいろなつながりがあり、自然から何かの恵みをいただくなら、しっか

りと感謝の気持ちをお返ししていくのが本来の作法です。でも、直接その人やそのものにお返しするだけではなくて、ぐるっと巡ってお返ししていく方法もありだと思っています。例えば、子どもが親に返すのではなくて、次の世代に引き継いでいく。バトンを渡していくような感謝の巡らせ方もあるということも大事なことです。多分、オイスカが広げようとしている有機農業も同じだと思うんですが、自然の恵みを使わせてもらううって、無理なく無駄なく、といったことを考えます。フィジーはヤシの木の恵みを余すことなく使っていて、実だつて中のジュースを飲んだら、そのままぼくんと放つてしまふんですが、よく見るとその近くには新しい芽が出てきているようなこともあって、すっかり巡っている。恵みをどうやって無理なくいただくのか、そこにある命を、尊いものとしてどう活かし切るかを考える時、そのものの命が輝くように使うことを、フィジーの人たちは考えているように思います。

中野 地球からいただいたも



ら、作っていかねければならないと思います。日本も古来から自然のリズムを重要視しながら生活をしてきていて、本当はそういう中にこそ健やかさがあったはずです。

中野 私たちは進歩しているのか、退化しているのか分から

ないですね。昔、

のは無駄なく使って、全部お返ししていく。村上さんがおっしゃったことはまさに日本にもかつてはあったことです。日常の生活の中にある素材は、全部自然に還るものでしたしね。だからごみ問題なんかも起きなかった。

村上 フィジールの離れ島でビニールのごみをヤシの実と同じように放つてしまう光景を見たことがあります。でも考えてみれば最近まで、自然に還るものしかなかった訳ですから、放つてしまえばよかったのが、急にビニールのような自然に還らない素材が生活の中に入り込んできたということなのです。新しいものは元々ある生活文化みたいなものをしっかりと大切にしながら、

自然にお天道様に手を 合わせる文化が日本にはある

「いただきます」の感謝は、人間ではなくお天道様に向けられていました。でも農業のあり方もすべて変わってしまったいて、効率を求めた結果、命の根だった稲を育てていたはずが、今ではただの食べ物として育てている状況があると嘆くご年配の方にお会いしたことがあります。大型機械で稲刈りをする時、田んぼの隅は手で刈り取らなければなら

らないのですが、それをしないで、後から全部土にすきこんでしまうのを見て涙が出たと話してくれました。作る人の心がそうだと、食べる人も同じようになってしまっているのではないかと思います。真心を込めて作ったらお米が輝いてくるけれど、合理的に一つのものとして作ったお米はちょっと違う。日本のお米の文化が消えて、自然に感謝する心

も失ってしまうのは、子どもたちにも申し訳ないように思います。これも自然を敬う心、自然への礼節を大切にしていなかった大人たちの責任ですね。子どもの心を育むさまざまな活動の中でオイスカもさらに意識をして伝えていく必要がありそうです。

村上 先ほどもお話しした、何もないところから何かを作り出せるということは、生きる力につながって、自信を持った大人になれると思うんです。オイスカの活動の中で、森に入ってさまざまな体験をするリトリートなども行っています。そういう経験の中で、作ることとイメージすること、創造と想像が合わさって文化ができ上っていくことを、子どもたちにも伝えていきたいと思っています。

川合 木育プロジェクトを通して、またオイスカと共に日本と世界の次世代の子どもたちが「地球に生まれてよかった」と思える活動が続け、使命を全うしてまいります。

中野 今日はどうもありがとうございました。今年もさまざまな現場での活躍に期待しています。



海外 ウズベキスタンスタディーツアー

会員ら30名がアラル海を訪問
6千本のサクサウルを植林

2023年10月22〜27日、全国の会員ら30名がウズベキスタンを訪れ、オイスカが取り組む沙漠緑化プロジェクトの現場で植林活動を体験しました。今回のスタディーツアーは、ウズベキスタンの歴史や文化、アラル海の現状やその課題解決に向けた活動について理解を深めてもらうことを目的に実施されたもので、北海道、宮城、富山、静岡、愛知、四国の各支部から会員が参加しました。

オイスカのカウンターパートであるカラカルパクスタン農業大学訪問時には、乾燥した土壌や水環境などが原因で、育苗に難しさを抱えている状況を視察し、日頃から野菜づくりをしているという参加者からは「有機肥料を投入して土壌を改良したほうがよいのでは」といった提案も出されました。翌日のアラル海での植林には、林学科の学生ら15名も参加。学生1名と日本人2名で一つのチームをつくり、役割分担をしながら6千本の苗木を植えることができました。



学生(左)が穴をあけ、苗木を穴に入れる人、土を寄せて植える人の3人組で作業を行った

移動時間が長く、駆け足での各所訪問となり、参加者からは「世界遺産も訪問したかった」といった声も聞かれましたが、「一番の目的であるアラル海での植林ができてよかった」「苗木が青々と育つ様子も見てみたい」といった感想が寄せられ、沙漠緑化の体験が印象に残った様子でした。

プロジェクト責任者の富樫智氏は「来年度以降は各支部がツアーを企画して多くの会員の皆さんが訪問してくれるのを楽しみにしている」と話しています。

国内 第4回オイスカ支援連携サミット

オイスカの人材育成のあり方を再確認
技能実習受け入れ企業と研修生OGの事例発表も

23年11月8日、四国研修センターでオイスカ支援連携サミット(以下、サミット)が開催されました。4度目となる今回は、国内4つの研修センター所長とその管轄地区の支部会長、本部担当者が集い、①OB連携推進の取り組みと進捗報告、②今年度制度変更が予定されている技能実習制度に対する課題・対策、③財政健全化10カ年計画の数値目標の見直しの3項目について話し合われました。

では、これまで国際貢献を目的としていた制度の下で、実習生の受け入れ企業・農家と共に海外青年の育成に取り組んできた姿勢を変えることなく貫いていくことが確認されました。

またサミットと連動して、同日に開催された四国支部主催「四国の集い」において報告会を実施。支部会員を中心に約300名の支援者、関係者が集まる中、30年以上にわたりオイスカの研修生・技能実習生の受け入れを行ってきた株式会社竹内農場の竹内一之代表取締役と、訪日研修生OGで現四国研修センター指導員のガディが、それぞれ事例を発表しました。竹内氏は、3世代にわたり海外青年を受け入れる中で、「家族の一員」として彼らに接してきたことや、日本人スタッフと同等の業務を通じ、技術の習得だけでなく「チャレンジする気持ち」を持ち、一人の人間として成長してもらいたいと述べて、これからも共に成長していく会社でありたいと締めくくりました。

国内各研修センターが持ち回りで開催してきた本サミット。今回は、関西研修センターと関西支部が中心となり実施される予定です。



四国支部の集いでは、研修生がそれぞれの国の衣装に身を包み、ダンスを披露した



四国支部会員を前に発表する竹内氏

またサミットと連動して、同日に開催された四国支部主催「四国の集い」において報告会を実施。支部会員を中心に約300名の支援者、関係者が集まる中、30年以上にわたりオイスカの研修生・技能実習生の受け入れを行ってきた株式会社竹内農場の竹内一之代表取締役と、訪日研修生OGで現四国研修センター指導員のガディが、それぞれ事例を発表しました。竹内氏は、3世代にわたり海外青年を受け入れる中で、「家族の一員」として彼らに接してきたことや、日本人スタッフと同等の業務を通じ、技術の習得だけでなく「チャレンジする気持ち」を持ち、一人の人間として成長してもらいたいと述べて、これからも共に成長していく会社でありたいと締めくくりました。

事例発表の様子はYouTubeでご覧いただけます！



〈竹内氏〉



〈ガディ〉



国内 西日本研修センター 過去最高の来場者を記録！ 第15回収穫感謝祭・秋

23年11月11日、西日本研修センターで収穫感謝祭・秋（以下、感謝祭）を開催。前日の雨で足元が心配される中、過去最高の1700名を超える来場者で賑わいました。

目玉の一つであるフードコーナーでは、センターの新米を使用した米粉パンや、センターの畑で採れた新鮮野菜など、20以上のブースが並びました。中でも、大相撲九州場所の宿舎として毎年センターに滞在する高田川部屋の出店では、角界一とも言われるちゃんこを提供。コロナ禍以降、会場での参加が難しかった力士らも4年ぶりに登場し、会場を盛り上げました。またステージでは、地元高校生による太鼓や地域グループによる歌やダンスのほか、研修生もそれぞれ自国のダンスを披露。最後には、農産物や力士の手



収穫祭は毎年地元の方々の協力で開催され、多くの人で賑わうセンター恒例の一大イベントとなっている

形色紙などが当たる抽選会や幕内力士と研修生による餅まきが行われ、大盛況でした。研修生にとっても、たくさん地域の方々と交流し、応援していただいていることを実感できる一日となりました。

国内 関西支部30周年・関西研修センター40周年 記念行事としてトークイベントを開催 アブラ農林業研修センター所長が登壇

23年11月23日、大阪市内で開催された「地球環境を考えるトークイベント2023秋」のメインスピーカーとして登壇したのは、フィリピン北部のアブラ農林業研修センターのデルフィン・テソロ所長。センターでの人材育成や植林をはじめとする環境保全の取り組みを紹介しながら、「災害のデパート」とも言われる同地での今後の挑戦につ

いて語りました。地域の人のためにと語るデルフィン所長の姿に、会場からは「宮沢賢治さんを彷彿とさせる」との声も聞かれました。また、同センターの運営をデルフィン所長に引き継ぎ、日本から現地の活動を支援してきた関西研修センターの清水利春所長も登壇。多くの日本人ボランティアをアブラ州に派遣していることや同州から技能実

習生を受け入れていることに触れ、デルフィン所長がいるからこそ安心して続けられる活動であることを強調し、信頼を寄せている様子がうかがえました。



会場にはデルフィン所長が送り出した技能実習生の受け入れ企業の担当者も足を運んだ

国内 「子供の森」計画 子ども親善大使事業 タイ・インドネシアから代表が来日 各地で活動への理解と協働の輪を育む

コロナ禍で見送られていた「子供の森」計画（以下、CFP）の子ども親善大使事業が、今年度再開し、9月にはタイ、11月にはインドネシアからそれぞれ5名の親善大使が来日。各地で支援者にお礼を伝え、現地での活動を報告したほか、学校での交流や環境学習なども行い、有意義なプログラムとなりました。

タイの親善大使は、愛知、岐阜、東京を訪問。岐阜では、

県の施設などで日本の森林やその利活用について学ぶワークショップに参加。豊かな森を育むことで、人間にも多くの恩恵があることへの気付きを得た様子でした。

一方、インドネシアの親善大使は、福岡、佐賀、山梨、東京を訪問。海岸林の保全に取り組む学校を訪れ、互いに活動報告を行ったり、オイスカが企業や行政などと協働して取り組む森づくりの現場の視察や、その森で採取したハーブの蒸留体験などを通じて、日本の森の問題やその課題解決に向けた取り組みについて学びを深めました。

子どもたちを引率したコーディネーターらにとっても多くの学びと気付きを得る機会となり、今後の活動に今回の学びが活かされ、CFPがさらに充実した活動となり広がっていくことが期待されます。



上／支援企業を訪問し、タイの環境課題やCFPの活動について紹介した下／植物の恵みを得る取り組みの一つとして精油を抽出する蒸留を体験

大阪マラソン2024 応援お願いします！

2月25日（日）に開催される大阪マラソンに、オイスカは今年もチャリティ寄附先団体として参画します。「海岸林再生プロジェクト」への支援につながることから、同プロジェクトのボランティアアピーター、支援企業・団体から推薦されたランナー、オイスカのスタッフなど、17名が、チャリティランナーとして出走します。

これまでも大阪マラソン開催前の寄附先団体としての各種活動や大会当日のランナーの応援やサポートなどに関しては、オイスカ関西支部の協力を得ながら取り組んできましたが、今大会は今年度就任した上村良成会長と吉田俊通事務局長が「大阪マラソンを盛り上げよう」と、自らエントリーし、現在トレー



当日はオイスカののぼりを立てて沿道から声援を送ります！



「二人とも大学時代はソフトテニス部。自信はありませんが頑張ります！」(吉田/右)

ニングに励んでいます。プロジェクトの責任者でもある吉田は、今回が4回目の大阪マラソンへの挑戦となり、プロジェクト支援のためにエントリーしてくださったチャリティランナーの皆さんと一緒に完走を目指します。チャリティランナーは、最低7万円の寄附をファンドレイジングサイト（シンカブル）で集めることで出場権が獲得でき、その寄附はプロジェクトへの支援となるため、ランナーの皆さんは広く協力を呼び掛けています。ファンドレイジング期間は1月24日までです。ぜひチャリティランナーの応援をよろしくお願いします。

ランナー支援は
こちらから！



2023 オイスカ冬募金に ご協力をお願いします

2023年11月10日から実施している「2023オイスカ冬募金」に、全国の多くの皆さまからご協力をいただき感謝申し上げます。これまでに280名の方から546万円の支援をいただいております（23年12月18日現在）。

すでにご案内の通り、オイスカが活動しているアジアや太平洋の各国では、地球温暖化による洪水や豪雨をはじめとする



2023オイスカ冬募金
募集期間：11月10日～2024年1月20日

さまざまな自然災害に生活を脅かされている現状があります。今直面している不安を少しでも取り除き、人々の生活を改善しながら、すべてのいのちが健やかに守られる世界を実現するために、私たちは活動を続けてきました。

今回の冬募金では、「住み続けられる未来」のため、「私にもできる」をテーマに1月20日まで募金を受け付けています。冬募金の特設サイトでは、各国が進むプロジェクトの担当者から声も掲載しています。ぜひご覧いただき、引き続きのご協力、よろしく申し上げます。

冬募金特設
サイトはこちら



新リーフレット完成！ ぜひご活用ください

この度、オイスカを初めて知る方向けの新しいリーフレットを作成しました。多岐にわたる活動の詳細はホームページでの



説明に譲り、「人を育てる」「森をつくる」「村おこし」の3つの活動を軸に紹介しています。かわいらしいイラストを使い、クイズも交え、楽しくオイスカを知ってもらえるリーフレットです。クイズの答えと解説は特設ページで見られるようになっています。

イベントでの配布、店舗などの人が集まる場所への設置にご協力いただける方は、必要部数や送付先などを左記にご連絡ください！

■連絡先

オイスカ本部啓発普及部

TEL 03-3332-5161

E-mail gsm@oisca.org

ご支援ありがとうございます！

新会員の紹介

新しく会員になられた方は次の通り。
(2023年10月1日～10月31日までの間、本部登録済分。順不同、敬称略)

■維持法人
【茨城県】イガラシ綜業株式会社
【愛知県】株式会社中村自動車／株式会社広州管工【香川県】有明株式会社
【ミヨシ電機】大分県【西日本電線株式会社

■維持個人
【愛知県】伊藤康伸／宮崎千春／石川健一／大見学／竹内稜人／田中直樹【三重県】竹内米子【香川県】岡野朱里子／鴨井俊徳／池上美奈／三木由美子／森田浩之／服部昌章／眞部康寛／城本宏【佐賀県】指山清範／石丸太郎／秀島昌慎

寄附

2023年9月1日～10月31日までにいただいた寄附は次の通り。
(順不同、敬称略)

- COSMOエコ基金／海外開発協力事業に510万8823円
- エプソン販売株式会社／海外開発協力事業に210万円
- UAゼンセン／「海岸林再生プロジェクト」に200万円
- 村上典子(愛知県)／人材育成事業と啓発普及事業に合せて101万円
- 日本労働組合総連合会／海外開発協力事業に90万円
- 住友重機械工業株式会社／富士山の森づくりに50万円
- 光安正治(福岡県)／人材育成事業に50万円
- 株式会社オギノ／富士山の森づくりに50万円
- いすゞ自動車株式会社／富士山の森づくりに50万円
- 株式会社ビームス／「子供の森」計画に41万6650円
- 九州電力生活協同組合／人材育成事業と海外開発協力事業に合せて100万円
- 四国電力総連／「子供の森」計画と啓発普及事業に合せて40万円
- オイスカ国際活動促進国会議員連盟／海外開発協力事業に37万1100円
- 東銀リース株式会社／「子供の森」計画に33万418円
- 仙台トヨベツト株式会社／「海岸林再生プロジェクト」に31万1545円
- 日本鉄道労働組合連合会／富士山の森づくりに30万円
- 泉雅文(香川県)／人材育成事業に30万円
- 石井淑雄(香川県)／人材育成事業に30万円
- トヨタモビリティパーツ株式会社宮城支社／「海岸林再生プロジェクト」に20万円
- 株式会社Ecoac／「子供の森」計画に17万2220円
- 株式会社高島屋／海外開発協力事業に14万9900円

●サミット・レイバー・ユニオン／「海岸林再生プロジェクト」に10万円

●丸眞株式会社／「子供の森」計画に12万6375円

●株式会社For Nature／人材育成事業に11万4000円

●富田司(愛知県)／啓発普及事業に10万円

●東洋金属株式会社／啓発普及事業に10万円

●東京電力労働組合／「子供の森」計画に10万円

●株式会社オーレック／「子供の森」計画に10万円

編集後記

表紙写真の大杉は、特集のテーマ「自然への礼節を持つ」に合う写真を選びましたが、何度も目にしているうちに、昇り龍にも見えてきたのは気のせいでしょうか。

本年もよろしくお願い申し上げます。(林)

次号予告

OISCA
MARCH | 3
2024

《TOPIC》
ラバウルに育つ
オイスカの米(仮)

OISCA 1月号 定価160円
発行人／中野悦子
発行所／公益財団法人オイスカ
〒168-0063 東京都杉並区和泉2丁目17番5号
TEL (03) 3322-5161 FAX (03) 3324-7111
E-mail oisca@oisca.org
編集：OISCA／林久美子 倉本有沙
アートディレクション／土肥幹人
デザイン／土肥幹人 坂巻貴行
印刷・製本／株式会社ケープリント

本誌掲載の記事・写真・イラストなどの無断転載を禁じます。



早川町にある湯島の大杉。樹齢1000年を超え、山梨県天然記念物に指定されるこの巨樹は、緑豊かな同町の中でも、一層生命力に溢れた力強い美しさを放つ。樹高45mの堂々たる姿を見上げると、人の手には及ばない自然への畏怖さえ感じられる。

今月の表紙写真

Photo by Arisa Kuramoto



理念 — 人と育む、地球といきる —

Vision

実現したい未来

人々がさまざまな違いを乗り越えて共存し、自然と調和して生きる世界

Mission

日々果たすべき使命・存在意義

私たちは、すべてのいのちが健やかに守られるよう、感謝の心を持つ「人」を育み、いのちの土台となる森づくりや、共に助け合う社会づくりに取り組みます

Value

私たちが大切にしていること

- 互いを理解し尊重
- 感謝の心を持ち、へこたれない「人」を育む
- 地域に根差し、住民の「良くしたい」を尊重

Spirit

Visionを達成するために、
私たち一人ひとりが
日々実践する心のあり方

- 先を展望する想像力を持つ
- 着実に一歩ずつ積み重ねる
- 仲間とともにチーム力を発揮する
- 挑戦し続ける
- 感謝の心を持つ
- へこたれない
- 経験から学び進化する
- 真摯である
- 人間味にあふれ、楽しみながら！

公益財団法人オイスカ

オイスカは、会員・支援者の皆さまからの会費や寄附金によって運営されています。「公益法人」としての認定を受けているため、所得税・法人税・相続税、また、条例で定められた自治体では住民税も控除対象となります。受領書をお届けしますので、申告の際にご利用ください。

● 特別会員（年額1口） 法人／10万円 個人／5万円

● 維持会員（年額1口） 法人／4万円 個人／2万円

● マンスリーサポーター 個人／月々2,000円～

※特別会員と維持会員には、会員としての差異はなく、口数とともに、自由にお選びください。

※会員、マンスリーサポーターの皆さまには、広報誌「OISCA」をお届けします。

※新入会年度は、入会月によって納入金額が異なります。

● 「子供の森」計画支援金（年額1口） 個人・法人／5,000円

※海外の支援地域の活動案内（年1回）やニュースレター（年2回）をお届けします。

※子どもたちからのグリーティングカード（年1回）が届きます。

ウェブからも支援のお申し込みができます ▶ <https://oisca.org/>

お問い合わせや資料請求のお申し込みは



公益財団法人
オイスカ

〒168-0063 東京都杉並区和泉2-17-5
☎ (03) 3322-5161 ☎ (03) 3324-7111
E-mail oisca@oisca.org
<https://oisca.org/>

国内研修センター

中部日本研修センター 〒470-0328 愛知県豊田市勤八町勤八27-56 ☎0565-42-1101 ☎0565-42-1103
関西研修センター 〒563-0101 大阪府豊能郡豊能町吉川120 ☎072-738-3699 ☎072-738-3901
四国研修センター 〒761-2103 香川県綾歌郡綾川町陶5179-1 ☎087-876-3333 ☎087-876-3334
西日本研修センター 〒811-1112 福岡県福岡市早良区小笠木678-1 ☎092-803-0311 ☎092-803-0322

国内支部

北海道支部 〒062-0931 札幌市豊平区平岸1条1丁目8-8 ラリス生活研究センター1F ☎011-867-9684 ☎011-867-9685
宮城県支部 〒980-0014 仙台市青葉区本町2-10-28 カメイ仙台グリーンシティビル6F ☎022-265-3350 ☎022-265-3350
首都圏支部 〒168-0063 東京都杉並区和泉2-17-5 (公財) オイスカ内 ☎03-3322-5161 ☎03-3324-7111
山梨県支部 〒400-0016 甲府市武田1-2-5 3F ☎055-267-5951 ☎055-267-5951
長野県支部 〒380-0838 長野市東町584 長野県経営者協会総務部内 ☎026-235-3522 ☎026-235-3529
富山県支部 〒939-2226 富山市下夕林280-3 ☎076-468-7120 ☎076-468-7128
静岡県支部 〒431-1115 浜松市西区和地町5815 ☎053-401-3980 ☎053-401-3981
愛知県支部 〒470-0328 豊田市勤八町勤八27-56 オイスカ中部日本研修センター内 ☎0565-42-1162 ☎0565-42-1103
岐阜県支部 〒503-8603 岐阜県大垣市久徳町100番地 太平洋工業㈱本社内 ☎0584-47-9420 ☎0584-47-9419
関西支部 〒541-0058 大阪府中央区南久宝寺町4-4-1 新御堂ビル ☎06-6244-2366
広島県支部 〒730-0041 広島市中区小町4-33 ㈱エネルギーL&B/パートナーズ内 ☎082-242-7804 ☎082-242-4706
四国支部 〒761-2103 香川県綾歌郡綾川町陶5179-1 オイスカ四国研修センター内 ☎087-876-3333 ☎087-876-3334
西日本支部 〒811-1112 福岡市早良区小笠木678-1 オイスカ西日本研修センター内 ☎092-803-0311 ☎092-803-0322

OISCA NETWORK

福 島 〒963-0534 郡山市日和田町字大塚50-8 (南根本産業内) ☎024-958-2643 ☎024-958-3741
茨 城 〒311-0113 那珂市中央852-9 ☎029-298-2539 ☎029-298-2539
神奈川 〒231-0003 横浜市中区北仲通3-33 関内フューチャーセンター ☎080-5016-2584
三 重 〒510-0958 三重県四日市市小古曽1-1-7 中村建設㈱内 ☎059-345-1101 ☎059-345-0745
奈 良 〒630-8444 奈良市今市町53-6 ☎0742-63-6277 ☎0742-63-6277
岡 山 〒700-0011 岡山市北区学南町2-6-11 PORTA美容室内 ☎086-252-3027 ☎086-252-3027
徳 島 〒770-8555 徳島市寺島町東2-29 四国電力徳島支店総務課内 ☎088-656-4593 ☎088-656-4511
愛 媛 〒790-0924 松山市南久米町乙24-84 ☎070-8524-0349 ☎089-948-8682
高 知 〒780-0870 高知市本町1-6-24 高知商工会議所総務企画部内 ☎088-875-1177 ☎088-873-0572
佐 賀 〒840-0826 佐賀市白土2-1-12-4F ☎0952-28-1368 ☎0952-28-1368
長 崎 〒858-0908 佐世保市光町109 戦艦内組内 ☎0956-47-2127 ☎0956-48-5069
熊 本 〒865-0055 玉名市大浜町2173-1 丸光グループ本社内 ☎0968-76-2161 ☎0968-76-2162
大 分 〒790-0002 大分市浜の1-3-7 ㈱大地企画内 ☎097-533-2101 ☎097-533-5040
宮 崎 〒880-0843 宮崎市下原町227-6 ☎0985-26-5673 ☎0985-26-5673
鹿児島 〒892-0817 鹿児島市小川町15-1 ㈱南日本総合サービス内 ☎099-224-3833
沖 縄 〒902-0077 沖縄県那覇市長田2-12-9 セレクション長田101 ☎098-943-2871 ☎098-943-2881